

## サハリンでの大江健三郎シンポジウム・参加報告

あるいは、ユジノサハリンスク紀行

今井 亮一

2015年9月29日の夜、私たちはユジノサハリンスクの空港に到着した。成田から直行便で2時間ほど、日本より1時間先行という時差を加えたとしても、わずか3時間の移動だ（だから帰路はほんの1時間）。荷物検査を終えると、サハリン州立図書館のピャトニツカさんとカマロヴァさんが迎えに来てくれていた。沼野充義先生のご紹介で、翌30日に同図書館で行われるシンポジウム「大江健三郎と世界文学：伝統と革新」に参加すべく、読売新聞文芸部の鶴飼哲夫氏と私は二泊三日の日程でサハリンを訪れたのだった。

空港から車で15分ほど、宿泊場所であるホテル「サハリン・サップロ」に着く。この時の車をはじめ、サハリンには日本車がかなり多く走っている（ほぼ100%という噂もある）。ホテルの名称といい、右側通行の道路を右ハンドルの車で疾駆するという体験といい、この地がロシアと日本の二国に跨る歴史を持つことが一気に身を持って感じられた。ある本に、「幹線道路を別にすれば、サハリンの道路事情はあまりよくない」とあるが、果たせるかな、ホテル裏手の路地には大きな陥没があり、車もぐわんと大きく上下した。するとピャトニツカヤさんが“a typical Russian road”と冗談を飛ばし、車内は笑いに溢れた（ロシア語を解さない我々のために、ピャトニツカヤさんは英語を、カマロヴァさんは日本語と英語を話してくれた）。こうして1日目の夜は深まった。

上で書いた「ある本」とは、村上春樹・吉本由美・都築響一による紀行集『東京するめクラブ・地球のはぐれ方』（文春文庫）である。三人がサハリンを訪れたのは10年ほど前のようだが、変わらないものもあれば変わったものもある（当たり前だ）。その頃はまだ東京からの直行便もなかった。あるいは同書には、サハリンには小売店がなく、市場で売られる日用品のほとんどが韓国・中国製品とあるが、今やユジノサハリンスクにはかなり綺麗なスーパーが一軒あり、三日目の帰国直前に寄った市場には日本製品（お菓子、調味料、化粧品など）がたくさん並んでいた。サハリン島にも——少なくともユジノサハリンスクの町には——ここ10年の間に「近代化」の波が押し寄せたということだろう。

同書には村上春樹による、簡便かつ読みやすいサハリンの歴史概観も載っている。そして最近の日本でこの名を耳にするようになった出来事を考えれば、やはり村上の『1Q84』でチェーホフの『サハリン島』が引用された件が思い出される。チェーホフがこの地を訪れたのは**1890**年、樺太千島交換条約で「樺太」がロシア領となった**1875**年と、ポーツマス条約で「サハリン」の南半分が再び日本領になった**1905**年との、振り返って見ればちょうど中間にあたる年で、『サハリン島』は当時送り込まれていた流刑囚の状況を詳しく取材した大著である。ユジノサハリンスクにはその名もズバリ「А. П. Чехов 著『サハリン島』博物館」がある。滞在2日目、シンポジウム後の市内視

察の時間に行ってみたものの、残念ながら「衛生の日」（害虫駆除などのための休館日）で入場は叶わなかった。とはいえ、白樺が並び緑の多い優雅な遊歩道のような博物館周辺には、チェーホフの肖像を刻んだ本型のオブジェや、パラソルを差して犬を連れた奥さんの銅像が立っていて、チェーホフの短篇世界が目の前に飛び出してきたようだった。

サハリンを訪れたロシア側の作家代表がチェーホフだとすれば、樺太を訪れた日本側代表には、例えば 1923 年の宮澤賢治がいる。2015-16 年版の『地球の歩き方』（ダイヤモンド社）はシベリアとサハリンが 1 冊にまとまり、さながら本全体でチェーホフの道程を再現しているようだが、ここには宮澤賢治の足跡の興味深い特集がある。また、シンポジウムにウラジオストクから参加されていたスレイメノヴァ・アイーダ氏にご教示いただいたことだが、1925 年には北原白秋が、1935 年には林芙美子が樺太を訪問している。前者は異様なほどハイテンションな紀行文『フレップ・トリップ』（岩波文庫）に、後者は静かな怒りと寂寥感に満ちた「樺太への旅」（立松和平編『林芙美子紀行集——下駄で歩いた巴里』岩波文庫所収）にそれぞれ当地での体験を記している。こうして作家の名前を並べてみると、日露の接点たる「サハリン文学」を夢想してみたくなる。

9 月 30 日、ホテルから徒歩 5 分ほどでサハリン州立図書館に着く。外観から近代的で立派な図書館で、いざ会場に入れば、外光を取り入れたとても明るい気持ちのよいホールだった。ちなみにユジノサハリンスクの町は、豊原時代に日本が開発した名残で札幌を思わせる碁盤目状の作りであり、ソ連時代の名残が似たような中層の建物（アパートらしい）が多く並んでいるものの、黄色や水色や緑色などに塗られて鮮やかな雰囲気だった。

ゴニュコヴァ・サハリン州文化大臣と今村・日本国総領事の挨拶で始まった大江健三郎シンポジウムの発表者は、サハリンの大学に所属される方が 9 人、先述のスレイメノヴァさんとカマロヴァさん、そして日本から鶴飼さんと私の計 12 人だった。どの発表も充実した内容の上に関心也多岐にわたるため大雑把な紹介しかできず心苦しいが、発表者の中の 3 人の学部生のうち、スコヴペンさんが『洪水は我が魂に及び』、ブルイトヴァさんが『万延元年のフットボール』という大江の中でもとりわけ読み難いと思われる作品で発表していたのが印象的だった。もう一人の学部生・サヴィノヴァさんの発表によれば、ロシアではこうした大江の中期作品の翻訳が充実しているとのことで、注目も集まりやすいのだろう。

駆け足でシンポジウムの報告を続けると、ニコノヴァ氏は大江のノーベル文学賞受賞スピーチをめぐる、イコニコヴァ氏は大江作品における、特に極東系の少数民族表象に関する発表だった（私自身は考えたこともない非常に新鮮な着眼点だった）。コルスコノフ氏は明治にまで遡って日露文学交流を概観され、スレイメノヴァ氏は現代社会の「疎外」の問題をめぐる、大江の「明るさ」と村上春樹の「暗さ」の比較研究を披露された。シャンキナ氏は現代ロシアのネット上に見られる俳句風の短詩を、テ・アレクサンドル氏は 19 ～ 20 世紀の日本作家のリアリズム回帰とロシア文学の関係を発表された。そして最後にカマロヴァさんは、サハリン州立図書館日本センターの活動を紹介してくれた。この図書館は、日本でいうカルチャーセンターのような機能も兼ねていて、市民の方々が撮った写真や作った工芸品なども展示されている。日本センターも市民に日本の行事を紹介している他、日本語の本も少なからず所蔵し、特に樺太関係の資料はさすがの充実度だった。シンポジウム後に見学させていただいたが、資料の中から鶴飼さんが平岡定太郎・樺太庁長官の写真を発見され、こ

れには全員で驚いた。平岡公威、筆名・三島由紀夫の祖父である。

そんな鵜飼氏は、大江がノーベル賞受賞記念式典に参加した際、記者兼友人のような形で同行した際のエピソードをシンポジウムで話してくださった。大江の厳しく頑固な面と、ユーモアや気配りを忘れない優しい面の双方がうかがえる話であった。

シンポジウムの結びにマルィシェヴァ・州立図書館長が全ての発表を受け、大江はその生涯を振り返りつつ、消費社会や政治の問題を取り上げてきたと指摘された通り、発表全体を大きくまとめるとすれば、日本とロシアの文学交流の長い歴史を踏まえつつ、政治・社会の大きな動きに大江という個人が文学の形でいかに応じてきたか、様々な面から検討された場であった。その際、翻訳状況やイコニコヴァ氏の論点が端的に示すように、日本的文脈の中だけでは見えにくい問題が数多く炙り出され、非常に興味深かった。

シンポジウム終了後は、鵜飼さんと私のために同時通訳をいただいたフェチソフ・アレクサンドル氏のガイドで、先述した通り図書館とユジノサハリンスク市内を見学させていただいた。上で述べていないものを落穂拾い的に報告しよう。

図書館では貴重書が集まる書庫と、パソコンが並ぶ電子書籍コーナーなども見せてもらった。書庫には初めてロシア語に訳された聖書など、私のような門外漢でも価値があること（だけ）は一目瞭然の立派な本が並んでいた。電子書籍コーナーからはロシア本土の図書館にアクセスし、膨大なデータを読むことができるそう。「中心」から遠いサハリンのような島には、とりわけ重要なシステムのようなのである。

市内視察については、3カ所のみ特筆したい。1カ所目はサハリン州立郷土博物館。豊原時代の樺太庁博物館の建物がそのまま使われ、正面には噴水が、裏には庭園もある。市民に人気の建物とのことで、私たちが立ち寄った際も結婚式の団が記念写真を撮っていた。建物の周りには、日本の戦車や大砲の他、奉安殿（御真影などを納めていた建物）も残っている。時間の都合で館内は見学しなかったが、サハリンの子供たちもここで郷土の歴史を学ぶそう。博物館の入口にはなぜか一組の狛犬が鎮座しているのだが、これが2カ所目の、今は栄光広場として丁寧に整備されている旧樺太神社跡と関連する。たくさんの胸像が整然と立ち並び、広場には終戦記念の大きな像が立っている綺麗な公園で、裏手の松林の間には、小高い山を登る階段が伸びている。これが樺太神社の参道の名残で、当時は鳥居や本殿がもちろんあったが現在はなく、狛犬だけがロシア人の目に留まり、博物館へ移されたのだそう。北原白秋の『フレップ・トリップ』には、「摂政宮殿下の行啓と差合になるので」旅程を変えたところだが、恐らくその時であろう、後に昭和天皇となる「摂政宮殿下」が樺太神社の松を植樹したと伝わっている。

以上2カ所が日本時代の名残だとすれば、3カ所目はソ連時代の名残とでも言うべきレーニン像だ。ユジノサハリンスク駅の前に屹立するこの像は、村上春樹も「雲をつかンばかり」と書いている通り、台座だけで4メートルはあろうかと思うほど、とにかく巨大である。極東最大とのことだ。ソ連崩壊時、首都近郊では多くのレーニン像が倒されるなど、騒ぎも大きかったそうだが、遠くサハリンはごく静かで、今もその偉容を残している。

10月1日、短いながら大変充実した体験をさせていただき、私たちは成田空港へ帰ってきた。し

かし、シンポジウムの名にも冠された「世界文学」というテーマに挑む現代文芸論研究室に所属する者として、付け焼刃のいかにも「アリバイ作り」的振舞いに見られようと、日付だけ見れば入れ代わるように 34 年前にサハリンを訪れた作家のことを書かずにはいられない。1981 年 10 月 2 日、李恢成が悲願のサハリン訪問を叶えている。後に『サハリンへの旅』（講談社文芸文庫）にまとめられる切実な体験談をここで紹介する余裕はないが、太平洋戦争終了後、日本に忘却され、ソ連の思惑に絡み取られ、その後も南北朝鮮や中国などとの関係に翻弄され続けた朝鮮系の人々の存在は、特記されねばならないだろう。政治的な通史としては、角田房子『悲しみの島サハリン——戦後責任の背景』（新潮文庫）に詳しいが、同書がいくつもの具体例を通じて描き出す通り、一口に「朝鮮系の人々」と言ってみたとこで、一世、二世、三世……と世代で大まかに区切っても「祖国」への意識も大きく変化し、十把一絡げの要約でなにかが言えるわけでもない……と、偉そうに書く私も、実はユジノサハリンスクで朝鮮系の人々を多く見かけたというわけでもない。入国審査時の担当者が恐らく朝鮮系の方だったのをはじめ、数名見かけた程度である。

本稿ではロシア（ソ連）と日本の両方の文化が混ざる地としてのサハリンを強調してきたが、それは両者にとって「中心」であったという意味ではなく、むしろ両者どちらから見ても「周縁」であった。戦後すぐの朝鮮系の人々への両国の態度は、そうした周縁の地におけるさらなる「外部」（終戦の結果、解放されて「日本人」ではなくなり、またソ連国籍も持っていない）の存在を示している。だが、牽強付会に考えれば、実は国家の枠組みの中に収まり切らない「周縁」や「外部」こそ、大江健三郎の「森」や「在」を支える要素であるだろう。シンポジウムの時点では私の力不足によりこうした豊かな可能性に気付けなかったのだが、今や批評的クリーシェとなった言葉を敢えて借りれば、特殊な地域性に徹することで世界文学となった大江健三郎を語る場所として、サハリン島ほどふさわしい土地はなかったのかもしれないと思うのである。

最後になったが、サハリン州立図書館やユジノサハリンスク日本国領事館の皆さんをはじめ、多くの方々に大変お世話になったことを、改めて感謝申し上げる。また、貴重な機会を紹介くださった沼野先生、ありがとうございました。今回は、チャーホフ曰く「チョウザメのような形の島」の尾鰭の付け根辺りを巡っただけだったが、いずれ機会があれば、せめて魚のお腹くらいまで行ってみたいと思います。